

フレンチ・パンク・バンドが伝えたヒロシマ

— Ludwig von 88のアルバム *Hiroshima* について —

戸板律子

第1章 はじめに

今から20年前の1995年、フランス・パンク界の人気バンドがヒロシマ¹⁾をテーマにした6曲入りミニアルバムを制作していた。Ludwig von 88の *Hiroshima - 50 ans d'inconscience* である。

被爆地広島から遠く離れた国で、原爆投下から50年経って、パンクロックという形でヒロシマを伝える音楽作品が生まれたことは、非常に興味深い。しかしながら、ポピュラー音楽でもあまり一般的とはいえないジャンルの作品であるだけに、広く世に知られてはいない。従ってこのアルバムを分析し、論じることには意義があると考ええる。

本稿では、まず第2章でこのバンドとアルバムについて簡単に紹介する。続いて楽曲の分析に移るが、歌われている内容に入る前に、第3章で表現方法について言葉と音の両面から検討してから、第4章で歌詞を詳しく見ていき、歌詞創作の背景についても考察する。第5章でそれらの分析をとおして認められたこのアルバムの特徴を総括し、その存在意義について述べる。

第2章 Ludwig von 88とミニアルバム *Hiroshima* — 50 ans d'inconscience について

1 Ludwig von 88²⁾

Ludwig von 88は1983年、パリ郊外で結成されたパンク～オルタナティブ・ロックのバンドである。初期の確定メンバーは Karim Berrouka (ヴォーカル)、Fabrice Barthelon (ヴォーカル)、Bruno Garcia (エレキギター)、Laurent Manet (ベース) で、後にベースが Charlu Ombre に交代、またプログラマーの Jean-Mi が新たに加わる。

1986年リリースのファースト・アルバム *Houlala!* で成功を掴み、翌年のセカンド・アルバム *Houlala 2 "La Mission"* で人気を固めた。

活動最盛期は80年代から90年代にかけてで、延々と続くことで有名だったというライブを活発に行い、ライブハウスだけでなく(或いはむしろ?) 廃工場、大学の食堂、デモ会場などでも演奏、国外公演もあった。またレコーディングも数多くこなし、フルアルバム、ミニアルバム、ライブ盤、自主制作盤、マキシ・シングル、スプリット盤(他アーティストと「相乗り」の形で収録・発売) などをも含めると、2001年までに少なくとも25枚をリリースしている。

90年代末以降は、ステージ活動・レコーディング共に少なくなる。メンバーは各自それぞれ

の活動へとシフトしていき、とりわけ Bruno が99年に *Sergent Garcia* として別のバンドを立ち上げたことが響いて、2001年の *La révolution n'est pas un dîner de gala* リリース以降、グループは実質上休眠状態に入る。但し正式な解散発表も休止宣言もしていない。

バンドの音楽的特徴は、エレキギターとリズムボックスを核としたサウンドで、先行グループの *Métal Urbain* や *Bérurier Noir* の影響が指摘されている。またレゲエの一ジャンルであるラガマフィンやスカ、サルサなどの要素を取り入れている。

歌の内容に関しては、ほとんどのバイオグラフィーが「まじめ」と「冗談」の両面性について触れている。但しどちらが狙いだったのかの見方は分かれるようで、表面上の他愛ない悪ふざけの裏に真面目な意味が仕込まれていると紹介しているものもあれば³⁾、バンドに政治性はなく、あくまで皆を笑わせることが目的だったとしているものもある⁴⁾。歌のテーマとしては、著名人や話題の人をネタにしたものが有名だが、戦争や貧困といった社会問題にコミットしたのも少なくない。本稿で取り上げるアルバム以外には、ソウル五輪の際に韓国の独裁体制に口を閉ざすメディアを皮肉った、1988年の *Sprint* などがある。

パンクという万人向けでないジャンルのため、シャンソン史の中でこのバンドに言及されることは殆どないが、仏オルタナティブ・ロック界では最も人気を集めたバンドのひとつであった。現在も同ジャンルのファンの間では、「文化財」⁵⁾ 的な伝説のバンドとして評価されているようである。また次世代アーティストへの影響力を示すものとして、2007年に Crash Disques よりリリースされた2枚組トリビュート・アルバム *Mort aux Ludwig von 88* があり、約40組のバンドが彼らのナンバーをカバーしている。

2 *Hiroshima - 50 ans d'inconscience*

Hiroshima - 50 ans d'inconscience は6曲入りのミニアルバムで、1995年8月に A Donf' レーベルからリリースされた。ちょうどこの年、仏大統領に選出されたばかりのジャック・シラクが6月に核実験再開を発表し、国内外から大きな非難がおこったが、アルバムのレコーディングはCD 付属冊子によれば同年5月で、シラクへの抗議を意図したものではない。広島への原爆投下から50年という節目に照準を合わせたもので、Karim はこの件に関する筆者の問い合わせに対して「つまらん偶然の一致になった」と回答している⁶⁾。

アルバムを構成する6曲は、原爆の完成から広島への投下とその結果までを、時系列に沿って表現している。各曲の内容については次章で述べるが、その語り口は至って真面目である。またCD 付属の冊子には、歌詞だけでなく、各曲の歌詞に先立っての解説と更に理解を深めるための資料の抜粋が掲載されている。末尾には参考資料リストと入手のための助言まで掲げてあり⁷⁾、全部で32ページにもなる。先述したとおり冗談や皮肉を多用するこのバンドとしては、このアルバムは異例の作といえる。売上データは入手できなかったが、ウェブ上のレビューは

好意的で「自らの行為の不正さを人類に意識させるのに、50年では足りなかったことを理解させてくれる」「全ての中学・高校の図書館が所蔵すべき」⁸⁾「1曲1曲がこの悲劇の1エピソードになっている音楽映画、付属の冊子は様々な胸を打つ証言で構成されている」「2度の原爆投下の残酷さは […] このような兵器は容認できないという証明となるはずであったのに、国家の権力者たちは人々の苦しみに対して全くの不感症であった」⁹⁾ などとしている。

第3章 表現方法

本章では、このアルバムで用いられている表現方法について、言葉（歌詞）と音（曲、歌唱・演奏、サウンド）それぞれの面からその特徴を考察する。

1 言葉

6曲の歌詞を通して読むと、直ちにひとつの特徴に気付く。それは人称と語り手を曲によって変えていることである。以下に各曲の内容を紹介しながら、順次それを示す。尚、作詞は全て Karim Berrouka、作曲は Ludwig von 88 とクレジットされている。以降の考察で言及する曲は、トラックナンバー 01～06 で示す。歌詞は全て CD 付属冊子に拠る。

01 Manhattan

第2次大戦中、米軍主導で原子爆弾開発と製造を目指した「マンハッタン計画」で、人類最初の核実験（トリニティ実験）を成功させた人々が歓喜に沸く様子を〈ils〉を主語に描いている。語り手は生み出されたばかりの原爆である。但し〈je〉としては出てこない。1人称単数としては、前置詞の後の moi、目的補語の me と所有形容詞が現れるのみである。

02 Enola Gay

原爆投下のために広島へ向けて飛行中の爆撃機「エノラ・ゲイ」号が見聞きし、感じていることが〈tu〉を主語に描かれている。エノラに〈tu〉で呼びかけている語り手自身は登場しない。

03 Hiroshima

8月6日朝の広島市民の様子が、3節のうち2節目までは〈ils〉を主語に描かれている。3節目に〈je〉が登場し、飛行機からパラシュートが降下するのを目撃、その模様を語る。つまり原爆投下の瞬間であるが、そのことは明言されていない。1・2節目の語り手は、遡って解釈すれば3節目の〈je〉であったともとれるが、3節目には〈ils〉は出てこず、決め手はない。

04 Little Boy

エノラ・ゲイの機中に搭載されている原爆「リトルボーイ」自身が語り手〈je〉となって、爆撃に臨む自分自身の意気込みを独白する。

05 Fire

原爆投下直後、身体に惨い損傷を受けて燃え盛る町をさまよう被爆者たちの姿を〈ils〉で描

く。語り手は登場しない。

06 Hibakusha

前曲に続いて被爆者〈ils〉の描写である。語り手も前曲同様、登場しない。異なる点は、前曲が被爆直後の人々の外面的描写が中心であるのに対し、こちらは被爆して生き残った人々の悲惨な現状、将来の暗い見通し、それによる内面の苦悩を語っていることである。タイトルどおり「ヒバクシャ」という呼び名で世界に知られる存在となった被爆者たちと言えるかもしれない。

このような語りの方をとることによって、何が得られているのだろうか。例えば、原爆開発者たちの狂気や原爆の破壊的性質について原爆に語らせたり、飛行中の爆撃機の状況を〈tu〉で代弁したりする必要は、同じ内容を伝えるためだけに無い。作者が3人称で描写すればよい。しかしそれでは、まずヒロシマという深刻なテーマを扱っているだけに、重く単調にならずに語るのは困難であろう。このアルバムはLudwig von 88というバンドないしパンクという音楽ジャンルのファンを対象として作られており、必ずしもヒロシマに関心があるとは限らない聴き手に、テーマの深刻さにもかかわらず受け入れられるには、工夫が必要である。3人称描写だけでなく、1人称の独白や2人称による呼びかけなど違った語り口を用いることは、単調さの回避につながっている。

次に、3人称による描写であれば、たとえ作者が語り手としてその中に出てこなくても、聴き手は演唱者を語り手として受け取るだろう。作者として伝えたいことを原爆に語らせたり、爆撃機の知覚の代弁として表現すれば、作者の存在が意識されることは少なくなる。作詞者のKarimは、聴き手自身に考えさせることを望んだと語っているが、この点に関しては第5章で改めて論じる。

更に、機械に語らせたり、呼びかけたり、知覚を持たせたりすることによって加わる面白味がある。つまり擬人法で、01、02、04で使われている。01では機械の冷徹な目による描写という設定が、原爆開発にかかわった人間の狂気を際立たせている。02・04では逆に、無生物の機械に知覚や心を持たせることで、意外性が加わっている。02のエノラ・ゲイは、次章で述べるとおり、狂気に捕われた人間より「人間らしい」。一方、04のリトルボーイの暴力性は、人間の破壊衝動の投影であろう。《J'irai》《Je filerai》《Je déchaînerai》《Je serai》《Je fractionnerai》という1人称単数・単純未来形の使用によって、破壊への積極的な意思が強調される。これも擬人法の効果である¹⁰⁾。

ところで03は、曲の途中で〈ils〉から〈je〉に主語が変わるという変則的な形をとっているが、これによってクローズアップ的な効果が生まれている。8月6日朝の広島市民の群像から、その中の1人へと焦点が絞られ、続いて描写の対象は、その人物が目撃した光景に切り替わる。

1機の飛行機の飛来とそこからのパラシュート降下の模様である。クローズアップされた人物に1人称で語らせることで、投下される側から見える光景としてのリアリティが与えられている。ここに時制の切り替えによる相乗的効果に加わっている。冒頭からの直説法半過去による状況描写が、2節目後半で直説法現在に一変する。過去語りによる状況描写は背景に後退し、ここから実況中継のように、まず市民たちの姿が描かれ（2節目後半4行）、その中にいたと考えられる1人の語り手が登場し（3節目2行目）、その人物の目が捉えている光景がその語りによって展開されるのである。これも描写を生き生きとしたものにする表現法として機能している。

以上のように、歌詞は技巧を駆使して書かれており、それだけでもなかなか読み応えがある。作詞者のKarimは現在作家として活動しており¹¹⁾、持ち前の言葉による表現への意欲を、パンクバンド活動における作詞の中で既に発揮していたものと思われる。

2 音

Ludwig von 88の音楽はパンクロックであり、エレキギターとリズムボックスの生み出す重厚な響き、たたみかける激しいビート、速いテンポは当然、歌詞を聞き取りにくくする。1でみたような読み応えのある歌詞も、聴き手の耳にどれほど捉えられていたかは不明である。

歌詞の乗るメロディは単調で、01・04では半音の上下のみを基調とするなど「歌」として耳に残りにくい。前面に出てくるのは破壊的・暴力的な音であるが、しかしまさにそうした「サウンド」によって伝えようとしているものがあると思われる。そこでまず、各曲の音楽・演奏・歌唱などについて述べる。

01から04までは、いずれもギターの繰返しフレーズに歌詞を乗せているが、曲のテンポが速いうえに4曲とおしてほとんど変わらず、メロディ的な変化にも乏しいので、曲の区別がつきにくいほどである。

05に入ると、テンポがやや落ちる。歌詞の乗る旋律という点では、この曲が最も単調で、ギター・リフに乗せて淡々と朗唱される音高は一定である。6節のうち偶数節では、奇数節の1オクターブ上で朗唱され、この時は叫ぶような調子になる。

06で曲調が一変する。メロディアスな旋律、ゆったりしたテンポ、リラックスしたリズムはカリブソ風で、演唱も前曲で現れる絶叫調から一転して柔らかく、ハリー・ベラフォンテの「日のあたる島」「さらばジャマイカ」もしくはザ・ビーチ・ボーイズの「ココモ」などのヒット曲を想起させる¹²⁾。このような曲調は、「ココモ」がまさにカリブのリゾート地へと恋人を誘う歌であるように、海辺の楽園を連想させるが、歌われているのはヒバクシャの絶望的な状況である。皮肉な効果を狙ったものと推測できるが、歌詞とのあまりのギャップは聴き手を戸惑わせずにおかない。

次に、曲のアレンジについて述べる。既に述べたとおり、このアルバムは6曲で一続きの原

戸板律子

爆史＝物語になっているが、サウンド面でも、アルバム全体をひとつの作品としてまとめあげるようにアレンジされている。

まずアルバム冒頭部と終結部に、効果音として吹きすさぶ風の音が入っている。継続時間は演奏が始まるまでの約24秒と、終わってからの約50秒で、かなり長く感じられる。次に曲と曲の間には、2曲を橋渡しするアレンジがある。まず原爆完成を歌う01の後奏中に、ニュースかドキュメンタリーのアナウンスのような音声がオーバーラップで入ってくる。内容は、リトルボーイの部品と核材料が、重巡洋艦インディアナポリス号によって、広島爆撃への発進基地テニアン島へ運搬されたことを語るもので、言語はフランス語である。この音声の背後から爆撃機の爆音のような音が聞こえてきて、広島へ向かうエノラ・ゲイについての02に移る。02の終わりには鳥たちの囀りが入っていて、8月6日朝・広島 of 平凡な光景を描写する03へとつなげている。リトルボーイ独白の04では、長い後奏の最後に英語でのカウントダウン音声 that 被さる。曲とは別の音源で、説明はないが、状況からエノラ・ゲイ乗組員のものと解釈される。その間も鳴り続けているエレキギター of 激しい演奏が、緊張感を徐々に高めている。爆撃直後の惨状を描写する05では、長い後奏に続いて日本語 of 音声 that 流れてきて驚かされる。浄土真宗 of 葬儀で詠まれる、通称「白骨の御文章」である¹³⁾。

我ヤ サキ 人ヤ サキ ケフ トモ シラス アス トモ シラス ヲクレ サキタツ 人ハ
モトノ シツク スエノ 露 ヨリモ シケシ ト イヘリ サレハ 朝 ニハ 紅顔 アリテ
タヘ ニハ 白骨ト ナレル 身 ナリ¹⁴⁾

音源については、これも明記されていないが、井伏鱒二 of 小説『黒い雨』を原作に作られた同名映画からのものであることが確認できた。これに続いて、ヒバクシャ of 宿命を語る06 of 陽気でリラックスしたイントロ that 流れてくる。

こうしたサウンド・アレンジはアルバム of 始まりと終わり、曲と曲 of つなぎだけでなく、曲中にも見られる。01では4節目と5節目 of 間奏に重ねて、トリニティ実験について伝えるアナウンス that 入る。先述した後奏部分 of、インディアナポリスについて of 語りと同音源と思われる。これに続いて、今度はバンドメンバー自身 of 声で「ヤッホー」というような歓喜 of 叫び声 that 数回入る。03では各節間奏部と後奏中 to 口笛 that 入る。先述したとおり、導入部では鳥 of 囀りが使われていたが、それと同様、普段と変わらぬ朝 of 気楽さが表現されている。次章で述べるとおり、Ludwic von 88は、広島市民にとって原爆投下 that 不意打ちであったことに力点をおいていることが歌詞から窺えるのだが、言葉だけでなく音声によってもそれを表現している。

以上のように、言葉とサウンド両面において表現上 of 工夫 that 認められる。

第4章 歌詞について

1 アルバム *Hiroshima* の伝えるヒロシマ

原爆の犠牲者たちとは生きる時代も国も異なるパンクバンドは、このアルバムで何を伝えようとしたのだろうか、彼らはヒロシマをどのように見ているのだろうか。以下にそれを原子爆弾、開発者・使用者、犠牲者・被爆者の3点について、歌詞をとおして考察する。

(1) 原子爆弾

まず当然ながら、その威力についての言及がある。原爆は熱線、爆風、放射能によって大きな損害を与える。01でこの世に出現したばかりの原爆自身が語っているのは、このうち熱線と爆風である(《pulsions / Eminemment destructrices》《souffle abrasif》《L'arme qui lâchera le feu / Et remuera la terre》《chaleur intense》)。放射能についての言及は、この時点では無い。

その力は無限(《D'une puissance sans limite》04)で類い稀(《D'une rare intensité》04)である。

従って太陽に喩えられる(《Je serai le soleil》04; 《Mille nouveaux soleils》02)。

いわば神話的スケールに達しており、投下する側にしてみれば聖なる火(《feu sacré》01)つまり浄化し、罰し、救済する神の正義である(《feu purificateur》《L'implacable châtement》04; 《L'envoyée salvatrice》01)。

こうした物理的破壊力の側面だけでなく、人類史的な観点からも、原爆が画期的なものとして捉えられている。それは新時代を開く鍵(《La clef qui ouvre une nouvelle ère》02)、かつてない新しい息吹(《un nouveau souffle / D'une fraîcheur inédite》04)で、二つの時代の狭間で(《entre deux ères》04)破壊を繰り返す。核兵器の出現によって、人類はこれまでとは全く違った時代に突入したのである。

(2) 開発者・使用者

擬人化された原爆の目には、自分をこの世に生み出した人間たちが、神の正義を公平に実践する使者を自負している様子が映る(《Ils voyaient tous en moi / L'envoyée salvatrice》《Missionnaires impartiaux》01)。また、聖なる火を創造する力を手にした自らを神と同一視している(《Ils sont les égaux des dieux / Ayant en leurs mains le moyen / De générer le feu》《Détenteurs du feu sacré》01)。先に引いたとおり、原爆は「新しい太陽」であり、その創造はプロメテウス神話を連想させる。

こうした科学的成果の達成だけでなく、国家間の競争における勝利も原爆にかかっていた(《Un besoin de briller / A la face des nations》04)。

彼らは興奮している(《surexcité》04; 《furieux》01)。それは勝利への陶醉(《L'ivresse de la victoire》01; 《Je rayonnerai vainqueur》04)や、抑え難い動物的破壊欲(《Une envie irrépressible》

《Je bouillonne d'enthousiasme》《Je déchaînerai les passions》《Mon fiel》04) だけでなく、成果を一刹那早く確かめたいとはやる心 (《Souhaitant au plus vite me voir brûler les planches》《l'envie les démangeait / De me jeter à même la foule / Pour mesurer l'étendue de ma fougue》01; 《Impatient d'exprimer / Une flamme et une ardeur》04) でもあった。つまりモラルを忘れた科学的好奇心である¹⁵⁾。

しかしそれは、原爆の無機的で冷徹な目で見れば、悪魔の術に捕われた姿である。要するに、無知だったのだ (《Ne sachant de quel démon immonde / Ils sont tombés sous l'emprise》01)。

ここに「理性を忘れた無知な人間」と「理知的な機械」という分かりやすい図式を読み取ることができるとすれば、もうひとつ「モラルを忘れた人間」と「より人間らしい機械」という意外性のある図式を02に読み取ることも可能である。この曲で描かれる擬人化されたエノラ・ゲイは心を持ち、その心が自分の行為に疑いを抱き (《ton cœur s'interroge》) それを封印している (《ton cœur devient pierre》)。またエノラの知覚する光景や音は喪のイメージを纏っており (《l'ébène froide et endeuillée》《dans un ciel d'enterrement》《chants funestes des moteurs》)、それはエノラの心象ととれる。この服喪の予感が「重苦しさ」の原因だろうか (《Tes paupières sont lourdes》《des cieus denses》《Litanie lourde et oppressante》)。

この原爆投下機の名が、機長の母親名からつけられたことはよく知られている。02で付与されている「人間性」は、そこからの発想かもしれない。そこに搭載されている、いわば胎内にいるリトルボーイは、エノラとは対照的に破壊衝動に満ちている。このことが無垢が生み出す悪の比喩になっている。エノラは無垢であり、無知である。たとえ悪意がなくとも、それは罪を犯すことになる (《Ton innocence deviendra crime》)。

(3) 犠牲者・被爆者

Ludwig von 88は、原爆投下が民間人に対する不意打ちであったという点を明確に打ち出そうとしている。まず、犠牲になったのは民間人である。彼らは平凡な日常生活に従事し (《aux labours quotidiens》《travaux ordinaires》《Journée anodine》03) 家族を軍隊にとられるなど、既に戦争で苦しんでいる人々だった (《cette guerre sans fin / Qui leur volait fils maris et parents》03)。

原爆投下は、そのような人々に対する不意打ちであった。広島町は無垢のイメージで語られ (《la ville restait vierge》03; 《Vierge et offerte cité inconsciente》02) 人々には大きな破壊に対する予測も備えもなかった (《sans crainte》《sans soupçon》03)。

その疑いも不安もない気持さは、原爆投下の瞬間まで続く。爆撃機は天使 (《Ange métallisé》03)、降下するパラシュートは蝶が町に挨拶を送っているかのようで、安心させるような光景ですらあった (《Un papillon gauche qui oscille désinvolte / Lentement il tombe saluant la ville /

De ses ailes tendues aux allures rassurantes》03)。

このような状況下で、人類がかつて経験したことのない災厄を被る彼らは、茫然自失するしかなく(《la terreur en leur cœur》《Voyage hallucinant》《hagards》《Se jettent instinctivement》《Spectres perdus ils s'égarerent affolés》《Désorientés》05)、何故自分たちがこのような目に遭うのかという理不尽さを味わう(《sans trop comprendre/Pourquoi l'enfer s'est abattu / Fournaise éternelle sur leur corps》06)。

その苦しみは言葉にできない。肉体的苦痛の大きさ故、或いは言葉を発する間もなく絶命したのかもしれない(《Leurs mots se collent aux lèvres calcinées / Et s'évadent en un rôle aux consonances tragiques》05)。或いは生き残った人々の無言の嘆きであろう(《gorge sèche et nouée》06)。

苦痛や無言の叫びによっても救いは得られず、虚しく無情である(《leurs cris restent vains leur douleur inutile》05; 《ciel sec et insensible》06)。

生き残ってヒバクシャとなった人々は、06で未来に希望のない(《futur marqué de noir》《sans trop d'espoir》《brouillard qu'est leur futur》) 弱く受け身の存在(《Ils survivent faibles et angoissés》《Les yeux attristés》)として描かれている。彼らは逃避し(《Cherchant réconfort dans la fuite》)諦め(《rester résignés et passifs》)ただ奇跡を待っている(《Pariant leur chances [sic] de guérisons / Sur l'improbable apparition / D'un arc-en-ciel multicolore》)。

その原因は、彼らの胎内に宿る災い(《Un mal intérieur》《ce feu profond qui les ronge》)である。放射能についての言及は、ここで初めて現れる。しかし放射能を直接表す語は使われていない。

2 歌詞創作の背景

6曲の歌詞を書いた Karim Berrouka は、1964年生まれフランス人である。当時31歳であった彼は、何に基づいてこれらの歌詞を書いたのだろうか。

CD 付属冊子に紹介されている参考資料は、書籍が新刊予告1点(下記*印)を含む12点、映画が3点とその原作となった小説2点で、下記にそのリストを掲げる。() は筆者による和文表記や邦題などの補足である。

書籍：

1. *La bombe atomique*, Claude Delmas [Complexe, 1985]
2. *Hiroshima bombe A*, Fletcher Knebel, Charles W. Bailey [J'ai Lu / Leur aventure, 1964]
3. *PIKA! DON! La leçon de Hiroshima Des survivants parlent pour la première fois. Et si demain...*, Groupe du 6 août / comité de publication des témoignages sur la bombe atomique d'Hiroshima [Autrement, 1985]

戸板律子

4. *Little Boy, récit des jours d'Hiroshima* [Quintette, 1984]
5. *J'avais six ans à Hiroshima*, Keiji Nakazawa (中沢啓治の証言の伝訳)¹⁶⁾ [Le Cherche Midi Editeur, 1995]
6. *Journal D'Hiroshima*, Michihiko Hachiya (『ヒロシマ日記』 蜂谷道彦) [Albin Michel, 1956]
7. *Hiroshima: la bombe* [La documentation française, 1986]
8. *Message pour la planète bleue* [Syros / IHN, 1986]
9. *L'ère atomique*, Roberto Maiocchi [Casterman / Gunti, 1993]
10. *Nous avons lancé la bombe atomique*, M. Miller, A. Spitzer [Le Sillage, 1948]
11. *Un monde sans arme nucléaire* [Transition / L'âge d'homme, 1995]
- *12. *Hiroshima 50 ans* [Autrement, 1995]

映画と原作小説：

1. *Dr Folamour – Comment j'ai appris à ne plus m'en faire et à aimer la bombe* (『博士の異常な愛情』)、Stanley Kubrick; 原作 (原題 *Red Alert*) Peter George [France-Empire, 1964]
2. *Pluie noire*, Shôhei Imamura (『黒い雨』 今村昌平); 原作 Masuji Ibuse (井伏鱒二) [Gallimard]
3. *Point limite*, Sydney Lumet (『未知への飛行』 原題 *Fail-Safe*)

歌詞につけられた資料の抜粋の出典は、上記リストのうち書籍1、2、3、6、10の5点からと、いくつかの新聞記事、出典記載のない談話 (マンハッタン計画を主導した物理学者オッペンハイマー、同計画現場責任者ファーレル、エノラ・ゲイ乗組員パーソンズ、日本への原爆投下を決定した当時の米大統領トルーマン)、及び上記リストに掲げられていない、広島平和文化センターによる被爆者証言集からである。

これらの抜粋は歌詞の説明や裏付けになっているが、そこから作詞者が何を資料から読み取り、表現しようとしたかがうかがえる。資料に記された被爆の実相、原爆投下直後の被爆者の様子は05に、放射能被害の実例は06に結実している。広島に向かうエノラ・ゲイの知覚するものは、*Hiroshima bombe A* からの抜粋にみられる詳細な飛行中の様子に想を得ているものと思われる。また、原爆投下の市民に対する不意打ち的性格、投下における新兵器実験の意図、開発者・使用者の欺瞞や驕りが読み取れる箇所が引用されている。とりわけ05では、歌詞に先立つ資料の締めくくりにトルーマンの言葉を長く引いている。その内容は、民間人を殺すことをできるだけ避けるために軍基地に原爆を投下した、これは降伏しなければ軍事産業施設を爆撃し、民間人に多くの死者が出るという警告であり、日本人に軍事都市を直ちに離れるよう呼びかける、というものである。資料を読み通し、アルバムを聴くと、このトルーマンの言葉は投下した側の欺瞞を皮肉にくっきり浮かび上がらせる。

ところで、上記リストのうち小説『黒い雨』は、ヒロシマに関する一次資料ではなく、一次

資料から生まれた芸術的創作である。そこから更に創作された同題映画の音声⁰⁵に取り込まれていたことは、前章で述べた。06歌詞の最後の4行は、以下のとおり小説の最後の部分から着想したことは明らかである。但しそのことは解説には記されていない。

《Parient leur chances [sic] de guérisons
Sur l'improbable apparition
D'un arc-en-ciel multicolore
Dans un ciel sec et insensible》

「今、もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」

どうせ叶わぬことと分っていても、重松は向うの山に目を移してそう占った¹⁷⁾。

ヒロシマを表現する創作が、更なる創作へとつながっている。

第5章 結び—Ludwig von 88 Hiroshima によるヒロシマの伝え方

第3章・第4章で、このアルバムがヒロシマをどうやって、どのように伝えているかをみてきた。本章ではそれらを振り返りつつ、このアルバムを特徴付けている点について、改めて考察する。そのために比較して参考になる、ヒロシマや核問題に触れた他のアーティストの楽曲例¹⁸⁾も、若干ではあるが掲げていくこととする。

既述のとおり、このアルバムは広島への原爆投下から50年という区切りの年に制作・リリースされた。フランスは核兵器保有国かつ原子力利用大国である。また偶然の一致とはいえ、アルバムリリースはフランス核実験再開とタイミングが重なった。従ってこのアルバムは、政治的とはいえなくとも、少なくとも社会的問題にコミットしている。ではどのような形でコミットしているのだろうか。

コミットの形として一般的にまず考えられるのは、直接的な告発や非難であろう。例えば、核実験再開に対して直接非難をぶつけた楽曲のひとつに Kargol's の Hirochirac がある。よりによってヒロシマからちょうど半世紀というタイミングで核実験を強行した「ヒロシラク」に向かって、やるならエリゼ宮でやれ (《Qu'il aille péter ses bombes à l'Elysée》) と歌っている¹⁹⁾。またチェルノブイリ原発事故を告発する Agnès Bihl の Silence on meurt は、罪のない子供たちを苦しめる深刻な健康被害の実態を次々に挙げ、核汚染を引き起こした張本人たちを糾弾する言葉で各節を締めくくっている (《C'est jamais les crevures qu'on laisse crever》など)²⁰⁾。これに対して、このアルバムには原爆を投下したアメリカに向けられた言葉は出てこない。作者の Karim 自身が「ストレートな告発のアルバムを作る気はなかった」と述べているとおり

である²¹⁾。

次に、直接非難をぶつけなくても、誇張や空想によって問題を強調し、聴き手に気付かせるという手法もある。SttellaのNagasaki ne profite jamaisでは、原発やその周辺で働く人々が突然変異で怪物のような姿にされている（《Il a les cheveux bleus et le zizi tout vert》《Elle mange avec son nez depuis que sa bouche est tombée》²²⁾。Les Fatals Picardsが福島原発事故後に発表したAtomic Twistなども同趣向である（《Avec leurs six jambes et leurs huit bras leurs cinq pieds et leurs seize doigts ils étaient vraiment très forts en twist》²³⁾。こうした例は勿論、たとえ想像力の逞しさを発揮しているとしても感心できないし、プロテストの効果としても大いに疑問がある。一方、同じく想像力を駆使して真摯に力強く訴える曲も作られている。Alain DayanのNagasakiは、主人公が廃墟となった長崎の町をさまよい「何故」と問いかける、1人称語りによるドラマ化で、曲調もドラマチックである²⁴⁾。このような誇張・空想・ドラマ化は、おふざけであろうと真摯であろうと、このアルバムに見られない²⁵⁾。

それに対してこのアルバムには、客観的・実証的であろうという姿勢がうかがえる。前章で述べたように、原爆に人間の姿を描写させる手法は、客観的視点の導入といえる。それ以外に、例えば歌詞の中に《rivière Ota》(04)という聞き慣れない地名や《5 29 45》(01)という謎めいた数字の羅列が出てくる。これらは付属の解説・関連資料へと聴き手を誘導し、そこでそれらが原爆投下目標地点を流れる「太田川」であることや、トリニティ実験が成功した「5時29分45秒」という時刻であることが明かされる。Karimは「ヒロシマのことを知る機会が段々少なくなるであろう若者たちに、ひとつの証言を提供したかった」、そのために「原爆の歴史 [= 物語] を再構築し、資料の抜粋を掲載した」²⁶⁾のだと語っている。

更にこのアルバムには、広島という地名にまつわるステレオタイプに依存した表現も出てこない。先に引いたHirochiracという造語は、同名の歌や映画などが他にもあるため最初の考案者が誰かは不明だが²⁷⁾、核の犠牲者側である広島と新たな犠牲者を生み出す側のシラクを一語にする無神経さに思い至らぬ、「核といえばヒロシマ」という安易な連想である。またRenaudのBoucan d'enfer²⁸⁾、La Grande SophieのDes choses qui arrivent à tout le monde²⁹⁾は、歌詞の中にHiroshimaという名を登場させているが、前者は伴侶に出て行かれて崩壊した人生の、後者は誰にでも起こるちょっとした挫折とは比べ物にならない、本当の「この世の終わり」の例として使っているに過ぎない。Hiroshimaという名には、それだけ短絡的なイメージに結びつく可能性があるのだが、そうしたものはこのアルバムに見出せない。

とはいえ勿論、それは全く客観的なデータの提示ではありえない。前章で述べたとおり、Ludwig von 88としてのヒロシマに対する着眼点というものがある。つまり原子爆弾は凄まじい破壊力を持つだけでなく、人類史に新しい時代への突入を刻んだものであること、原爆開発

者・使用者たちは科学的・戦略的野望のうちに理性を忘れていたこと、原爆投下は民間人に対する不意打ちであり、残酷な大量殺戮となっただけでなく、将来も癒されぬ肉体的・精神的苦悩を背負って生きていかざるを得ないヒバクシャを生み出したこと、などである。Ludwig von 88はそれらを第3章1でみたような叙述の技法を用いて提示した。即ち曲によって語りの人称を変える、擬人法を用いる、実況中継のような視点を取り入れるなどである。またサウンドにも工夫を施し、効果音や外部の音素材を取り入れて、彼らの伝えたいヒロシマを表現していた。そして6曲をゆるやかに繋ぎながらひとつにまとめあげ、原爆開発からヒバクシャの誕生までをひとつの流れとして提示するもの、つまり「ひとつの証言」に、このアルバムを仕上げていた。

ここで、6曲中いずれにおいても作者自身が前面に出ることはなかったことを思い出したい。被爆者の惨状を語る語り手は登場せず(05、06)、原爆開発成功に沸く人間を冷徹な目で見つめるのも、破壊衝動を語るのも機械である(01、04)。また、もの言わぬ機械に呼びかける人物も姿は見えず、機械の気持ちを代弁しているにすぎない(02)。原爆投下の瞬間を語るのは、あの日の広島市民の1人である(03)。これらの見方を提供しているはずの作者の存在は、殆ど感じられない。これを、ある見解を表明する主体としての責任回避ととることもできよう。しかし、あえて前面に出ないことによって、聴き手自身に考えさせることができる。ポピュラー音楽のファン心理として、愛好するアーティストの見方への同調指向があることを考えると、それを回避するための選択だったのではないかと推測できる。それを裏付けるように、Karimはストレートな糾弾は元々意見の一致している者たちを更に煽るだけであり、むしろ間接的な表現を用いることで、聴き手に自分自身で考えさせることができるのではないかと語っている³⁰⁾。

Ludwig von 88には明確なヒロシマ観があり、それを伝えようという意思があった。そのため彼らは様々な資料を読み込んだうえで歌詞を書き、音を作り上げた。それだけでなく、資料の提供も行っている。フランスではレコードに歌詞がパッケージされていないことも珍しくないことを考えると、歌詞と参考資料合わせて32ページの冊子は異例である。しかもその全てが文字で埋め尽くされており、画像としては、文字の背景に被爆者や8時15分で止まった時計の写真などが使われているのみである。カバーも焼け野原の中の原爆ドームの写真と、グループ名、アルバムタイトルの記載だけで、ファンを喜ばせ、より売上につながるであろうメンバーの写真などは、このアルバムのヴィジュアルの中に1点もない。表現への真摯な取り組みといえよう。パンクロックという万人向けでないジャンルでの表現であるのに加え、パロディやからかいを多用するこのグループとしても異例の作であるため、ファンも含めてそれがどの程度の広がりや伝わったのかは不明だが³¹⁾、それだけ一層、立場・時代・国の違いを越えて真摯に伝えようとした試みには意義がある。

被爆地広島から遠く離れたフランスで、被爆50年後にこのような音楽表現が生まれた。それはヒロシマを記録し、記憶し、理解し、伝えようと務めてきた多くの人々の仕事があったからであり、とりわけ被爆の実相を証言した人々の、肉体的・精神的苦しみを圧しての労力と、自分たちと同じ不幸が繰り返されないようにという強い願いがあったからに他ならない。過去の記憶を継承すること、他者の痛みへの想像力を働かせることは、人類が紛争の危機を乗り越えるための課題である。その試みという見地からすると、このアルバムがそれに成功しているかどうかは、改めて検証する必要があるが、その検証作業はその課題解決の方法を探ることにつながるであろう。

註

- 1) 広島への原爆投下という歴史上の出来事の意で「ヒロシマ」を用い、地名としての「広島」と区別する。
- 2) グループ名の表記は Ludwig Von 88も見られるが、本稿では引用を除いて von で統一する。グループのバイオグラフィー、ディスコグラフィーなどは、公式のものが見つからなかったため、複数のウェブサイトの情報を照合した。下記にそのリストを掲げ、以下の註では出典を「リンク1」のように記載する。執筆者名と日付は分かる限り [] 内に記す。一般の音楽ファンによる執筆と思われるものが多い。
 1. <http://cd1d.com/fr/artist/ludwig-von-88/biography>
 2. https://fr.wikipedia.org/wiki/Ludwig_von_88
 3. <http://www.hardcore-punk.net/groupe/52/ludwig-von-88> [Sebastien]
 4. <http://legalization.free.fr/ludwig.html>
 5. <http://metal-punkbios.skyrock.com/337325831-Ludwig-von-88.html> [metal-punkbios, 2006年1月6日]
 6. <http://www.music-story.com/ludwig-von-88/biographie> [Benjamin D'Algerre]
 7. <http://musique.ados.fr/Ludwig-Von-88.html>
 8. <http://www.rockmadeinfrance.com/encyclo/ludwig-von-88/> [hervé, 2008年8月17日]
 9. <http://www.hyjoo.com/sujet-20015.html> [croschaine, 2006年1月19日]
- 3) 《les textes revendicatifs, faussetment naïfs et bourrés de second degré.》《Si d'emblée, les morceaux du Ludwig Von 88 font sourire [...], ils font également réfléchir sur des thèmes sérieux et les problèmes socio-politiques de l'époque.》[リンク7]
- 4) 《Loin de vouloir représenter une jeunesse en manque d'engagement, les Ludwig ne semblent pas animés d'autres intentions que de faire marrer tout le monde.》[リンク6]; 《pas de politique, mais un humour premier degré》[リンク8]
- 5) リンク1
- 6) 《c'est à la base pour le 50ème anniv d'Hiroshima et pour dénoncer l'utilisation de l'énergie atomique. Chirac n'a juste rien trouvé de mieux cette année de relancer les essais. Une

coïncidence un peu pourrie.》2014年10月18日付筆者宛メール

- 7) 絶版になっているものは図書館で探してみることに、また一部はパリの Institut Hiroshima Nagasaki (フランス在住の作家・平和活動家の美帆シボにより、1982年に設立) で入手可能として、住所を掲載している。
- 8) Fred Delforge, <http://www.zicazic.com/zicazine/index.php?option=content&task=view&id=2897&Itemid=2>, 2003年1月1日付
- 9) <http://cd1d.com/fr/album/hiroshima>
- 10) 擬人法は「意外な類推によって目から鱗が落ちるような新鮮な感動・驚きを体験」させる。また「抽象物や動植物に人間的感情や思いを仮託することによって自由に、楽しく、面白く諸説を展開することが出来る。」『レトリック辞典』野内良三、国書刊行会、1998、pp.93-94
- 11) 小説 *Fées, weed et guillotines* [Actusf, 2014] は、分野を問わずファンタジーの創作を対象とした Elbakin.net 賞を受賞している。
- 12) 特定の楽曲を意識したものかは不明であるが、聴き比べてみると、バンドが通常使わないトランペットとトロンボーンを使ったアレンジが、間奏部に管楽器の入る「日のあたる島」と「ココモ」に近い。Harry Belafonte の *Island in the Sun* は Harry Belafonte 作詞、Irving Burgie 作曲、1957年、また Jamaica Farewell は Irving Burgie 作、1957年。The Beach Boys の *Kokomo* は J. Phillips - S. McKenzie - M. Love - T. Melcher 作、1988年録音。
- 13) 本願寺中興の祖、蓮如 [1415-1499] が門弟の要望に応じて、教えを説くために書いた手紙が後に『五帖御文章』として編纂された。その5帖目第16通。『浄土真宗辞典』浄土真宗本願寺派総合研究所編、本願寺出版社、2013、pp.218-219
- 14) 『蓮如上人全集第一巻 五帖御文篇』大谷暢順編、中央公論社、1998、p.445
- 15) 実際は、マンハッタン計画に協力した科学者たちは、日本に勝つための原爆使用の必要性に対する疑問や、米国の無予告の投下が招くであろう多国間の核開発競争に対する危機感を抱いていた。1945年6月、ノーベル物理学賞受賞者 J. フランク博士をはじめとするシカゴ大学の核科学者7人が密かに会議を開き、原爆投下に反対する報告書を軍に提出した。フランク博士が同年春に書いたとみられる手書きのメモからは、「倫理的、政治的な準備がないまま、人類は原子爆弾を手に入れてしまった」「地球上の人類の文化と生命にとって致命的な危機」など、科学者として抱いた苦悩が読み取れる。毎日新聞2015年7月21日付記事「米科学者『致命的な危機』」清水憲司執筆参照。
- 16) 《Les textes qui suivent ont été traduits par Miho Shimma et Michel Cibot à partir du témoignage de Keiji Nakazawa.》[*J'avais six ans à Hiroshima*, p.33] と序文に記されているのみで、現署名の記載はない。
- 17) 『黒い雨』井伏鱒二、新潮文庫、2003年、p.384
- 18) 本来なら「ヒロシマ」そのものを主題にした楽曲と比較すべきであるが、それら1点1点の分析まで踏み込むには、稿を改めざるをえない。こうした楽曲例として現時点で著者が見つけたものは、以下の4点である。
 1. Hiroshima [G. Moustaki 作・歌、1972]

2. Hiroshima [M. Fanon 作詞、J-P. Roseau 作曲、Francesca Solleville 歌、1972]
3. Bura bura [Colette Magny 作・朗唱、1969]
4. Un type bien [M. Tricoche 作詞、L. Meliz - C. Soubiron 作曲、Manau 歌、2000]
- 19) E. Cabrera - Y. Deprauw 作詞、X. Baux - E. Cabrera - Y. Deprauw - B. Lassalle - E. Toupin. *Ma! j'galère* [On A Faim, 1996] 収録
- 20) グリーンピース企画のコンピレーション CD #20ans *Tchernobyl* [Productions Spéciales, 2006] 収録。A. Bihl 作詞、N. Montazaud 作曲。
- 21) 《Je n'ai pas voulu faire un disque de dénonciation pur et simple.》リンク9のバイオグラフィーに引用された Karim の談話より。出典は記されていない。
- 22) J. L. Fonck 作。 *Manneken pis not war - Faisez la mouche pas la guêpe* [T4A, 1992] 収録。
- 23) P. Léger - J-M. Sauvagnargues - Y. Giraud - L. Honel 作、 *Septième ciel* [Adone, 2013] 収録。
- 24) A. Dayan 作詞、J. Labiche 作曲。LP *Nagasaki* [Discodis, 1975] 収録
- 25) 勿論、感動的なドラマ化はパンク音楽にはそぐわないであろうが。
- 26) 《J'ai voulu offrir un témoignage à des jeunes qui ont entendu parler d'Hiroshima mais en entendront de moins en moins parler. J'ai retracé l'histoire ; j'ai mis des extraits de textes;》リンク9 (註21参照)
- 27) Hirochirac のタイトルで、Kargol's、Rasta Bigoud [表記は Hirochirak]、Larsène et les Lutins の歌、René Vautier 監督のドキュメンタリー映画がある。またウェブ版 *L'Express* 1995年10月19日付記事によれば、パリの Deux-Anes 劇場で *Hirochirac mon amour* という芝居を上演しており、それをドイツの *Focus* 誌が *Hirochirac ohne Amour* [Hirochirac sans amour の意] のタイトルで紹介していた [http://www.lexpress.fr/informations/express-france-l-oeil-de-l-etranger_610312.html#wfrsw8gOQwH3V3Hj.99]。更にポーランドのパンクバンド Włochaty も Hirochirac というタイトルの曲でシラクの核実験再開を批判している。 *Wojna Przeciwno Ziemi* [NiktNicNieWie, 1996] 収録。
- 28) Renaud Séchan 作詞、J-P. Bucolo 作曲。 *Boucan d'enfer* [Virgin, 2002] 収録。
- 29) Sophie Huriaux 作。 *Le porte-bonheur* [Epic Records, 2001] 収録。
- 30) 《Si on fait du premier degré, dit Karim, on rameute les gens qui sont d'accord; peut-être que ne pas dire directement les choses, c'est aussi demander aux gens de faire un effort, de s'interroger.》リンク9 (註21参照)
- 31) 冊子に掲げた資料について、Karim は「自分たちのファンはヒロシマについての本を1冊でも読んでみようという努力などしないかもしれないが」と述べている。リンク9 (註21参照)

“Hiroshima” raconté par un groupe de punk français – L’album *Hiroshima* de Ludwig von 88 –

TOITA Ritsuko

Ludwig von 88, un des groupes les plus populaires des années 80-90, a créé un mini-album intitulé *Hiroshima – 50 ans d’inconscience*. Sorti en août 1995, c’est-à-dire année qui commémorait le cinquantième anniversaire du bombardement de Hiroshima, l’album retrace en six titres l’histoire de cet événement, commençant par la création de la première arme nucléaire jusqu’à la conséquence tragique de son utilisation.

L’analyse des textes et du son permet de comprendre que le groupe s’est considérablement documenté pour produire une matière verbale et sonore capable de transmettre à la jeunesse française l’expérience de Hiroshima.

Les textes sont écrits sans deuxième degré ni exagération ni cliché facile. Par la diversification du schème narratif et la personnification d’objets tels que la bombe ou l’avion, les auditeurs sont invités à suivre l’événement par leur propre imagination plutôt que par l’acceptation passive du point de vue du groupe qu’ils admirent. Et ils sont incités à en savoir plus grâce à un livret de 32 pages rempli de documents. Enfin, par ses choix musicaux et ses arrangements, le groupe ajoute à la puissance entraînante des sons et des rythmes, des matières et des effets sonores variés qui rendent chaque titre plus évocateur et donnent une cohérence au récit que porte l’album entier.

Ce travail sérieux et sincère, réalisé par de jeunes artistes nés et vivants loin de Hiroshima mérite notre attention.